

年間第28主日

福音朗読 マルコ 10・17-30

2024.10.13 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

イエス様が「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」と言われたときに、「弟子たちはこの言葉を聞いて驚いた」（マルコ 10・23-24）というふうに福音書が書いてるんですけども、なんで弟子たちが驚いたのかと言えば、これから弟子たちとイエス様が向かっているエルサレム、そしてそのエルサレムにある神殿では毎日捧げものが捧げられております。それで、お金持ちの人は牛を捧げることができます。貧しい人は鳩——ルカによる福音ではヨセフとマリアは鳩を捧げたって出てきます（ルカ 2・24）——鳩を捧げるし、場合によっては全然捧げものができないことになります。だから、お金持ちは大きな牛を捧げることができるから、天の国にもっと簡単にいれるって思っていたら、財産のある者は難しいんだとイエス様がおっしゃる。そこで驚いたわけです。

イエス様が人々に分かって欲しいのは、「神様はご自分のところに人々が何を持って来るのかっていうことをずうっと気にしている、そういう神様ではないんだ。むしろ、人間同士が互いに愛し合う、人々が自分ということから出てお互い同士を支え合う、それを子どもたちの親として望んでおられる、そういう神様なんだよ」ということを一所懸命言いたいわけです。でも、金持ちは何でも買えると思うんです。永遠の命も、お金を出せばあるいは何かを捧げれば手に入るっていうことを期待していた。だけど自分自身が変わらなきゃ駄目なんだよっていう、そのことがイエス様が言いたいと言いましょうか、つまりは、永遠の命というのは何かを捧げものをして手に入れるものではなくて、自分自身が神様のようになっていく、そういうことなのだということを伝えたいと思うんです。

ですから、「持ち物を売り払って貧しい人に施せ」って言うけれども、それはイエス様が非常に大きなことを要求されたというよりも、まず持っているものを売り払って貧しい人に施したのはイエス様ご自身なんです。「でもイエス様は初めから貧しい人だったはずですけど。売り払ったり、施したり、そういうのはしてないはずですよ」と思うかもしれませんが、イエス様が持っておられるほんとの財産は、父である神との完全な一致である、神であるということです。

わたしたちは信仰告白の中で、その神である方はわたしたちにご自分の命を分け与えるために人となり、そして十字架に至るまでの道を歩んで、その父である神様と一致した全生涯をわたしたちの中で過ごすことを通して、わたしたち一人ひとりにご自分が持っておられる父である神様との一致の恵みを分け与え

ようとされた、あるいは分け与えてくださった方なんだというふうに言います。だから、イエス様に似た者になっていくようにわたしたちは絶えず招かれる。それが永遠の命ということです。自分自身の持っている物がずうっと保たれるだろうか、あるいは欲している物が手に入るだろうかという、あるいは他の人が自分をどのように扱うだろうかという自分自身の関心から解放され、他の人に心が向かうという、そのことこそが永遠の命なんだ、と。とするならば、それは死んだ後に始まるのではなくて、完全ではないかもしれないけど、今この地上の生涯の中から既に始まっている。それは、ヨハネの福音書がはっきり言うことですが、それはどの福音書でも共通のイエス様のメッセージです。

聖人たちの生涯を見れば、中には文字通りの意味で持っている物を全て売り払って人々に施して、そして祈りの生活に入ったという聖人たちがいるけれども、わたしたちが完全にそれができなかったとしても、百かゼロではない、今自分にできること、イエス様のように他の人に関心を向けるっていう思いで少しずつ努めていくということが大切なんだと思います。

財産を売り払うってということは、決して物質的な物だけではない。売り払うのは何のためかと言えば、それをお金にして、どんな人でも受け取る人に役に立つ、そういう物に変えるっていう意味があります。この金持ちの人が土地とか家畜とかを持っていたとしても、その物を、それだけを渡されても、一人の人だけに渡すことができるかもしれないし、あるいは場合によって羊をもらっても羊飼いやなければ、農夫でなければちょっと困っちゃうって言う——まあ、食べるかもしれないけど——それは、自分の持っている物を相手にとってふさわしい物に変えて渡すって言うことの表現が「売り払って施す」って言うことなんだというふうに解釈することができるんだと思います。

ですから、わたしたちが神様からいただいている、たとえば今日だってミサを通してイエス様との新しい一致をいただく、その恵みをではこれから出会う人々にどのように分かち合っていくのかということのためには相手の状況によって変わってきます。イエス様も出会う人々に、相手にとって相応しい接し方、相応しい恵みをお与えになったということが聖書には出て来るわけです。

だから、たとえば信仰の恵みを分かち合うと言っても、神様の話を直接することが、場合によっては相応しいけれども、場合によっては相手に何の意味もない、むしろ相手に苦しみを増し加えることになるって言う場合もあるかもしれない。だから、「人を見て法を説け」って日本のことわざにもありますけれども、相手によって何が、だから、場合によってはそういう神様の話を延々とするよりもひとつの微笑みだったり優しい言葉をかける、また何か自分のちょっとした態度の場合のほうがより恵みを分かち合うことになるということも多いのだと思います。

そう言う意味では、わたしたちは自分がいただいた恵みをどのように分かち合うのかについて、分かち合いたいという心だけではない——分かち合いたいという心はもちろん基本ですけども——、観察力と頭を使わなければならないんだと思います。それはまことの知恵を求める必要があるわけです。

今日わたしたちがこのごミサを通して一人ひとりがイエス様との一致の恵み、言い換えれば、永遠の命の恵みをいただきます。それをわたしたち自身がほんとうに恵みとして感謝して受け取り、そして出会う人々にいただいたものを分かち合っていくにはどのようにしたらよいのか、その見分ける知恵の恵みを願いながら、このごミサを通して互いに恵みを祈り合いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>